

歴史にたいする一つの立場のとり方において、優に群書を圧倒している。とりわけ、本書のメリットは、全3冊で、1932年から現代（サリット政権）にかけての時期をカバーしようとする点で、他にあまり類書を見ない。

本書は、1912年の失敗した革命の記述にはじまり、1935年におけるラーマ7世の退位で終わっている。従って、本書の主たるテーマは、1932年の立憲クーデターの政治過程を敘事的に記述することであるといえる。1932年の人民党革命の前史に、1912年の革命を据えたものは、あまり他に例がない。おおかたのタイ人は、両者を断絶させて考えるからだ。その他、本書には、いくつかの特色がある。1933年のルアン・プラディットによる民族経済計画案提出のいきさつに、異常にページを割いている。さらに、ラーマ7世退位事件についての記述もくわしい。これらを総合して考えると、筆者 Withesakarani（もちろん偽名）の立場は、貴族主義から民主主義への移行を歴史の理想と考え、その流路にそぐわないものには、Thorarat（暴君）のレッテルをはる立場である。筆者は、従って、1932年革命の意義を認めながらも、人民党のKhanathipatai（集団独裁）に抵抗して王位を退いたラーマ7世にたいしては、同情的である。この立場は、タイの中間層知識人にあまねく共通する考え方でもある。

本書は、タイのすべての本に見られる特色を備え、なまの資料をそのまま羅列する傾向をやはり脱し切れずにいる。それに加えてたとえば Thai Noi の本（「10人の総理大臣」）などと比べると、個々の政治家の性格にたいする関心が幾分稀薄で、部分的にはまったく面白みを欠く。そのほか、もし歴史的脈絡を重んずるならば当然触れるべき事柄がとばされているのが目立つ。人民党の形成過程についての説明が弱いし、革命直後の国王の心理、プレイヤー・マノーパコーンの政治的性格についてのコメント、王党叛乱(1933年)の際のボワラデート親王の動機と当時の国王の心境、1933年のタイ国初の総選挙についての記述、などが落ちている。いずれも、重要な事柄なので、惜しまれる。こういう風に、歴史の内的連関性を実証的に読む努力が欠けるところに、タイのこうした歴史書一般の欠点がある。こうした非歴史的な思惟様式がタイに目立つのはなぜだろうか。

これらの欠点にもかかわらず、あえて本書を推すのは、やはり、一つの大部なシリーズで現代史をカバー

しようとする雄大な構想が買えるからであり、同時に、特定個人の太鼓持ちが多い類書のなかで、やはり、一つの理念で敘述を貫いている点は馬鹿にできないからだ。本書に続く「暗黒の時代」ではピブーンが中心的に登場するが、そこでは、かなり動機還元法的手法がとられ、面白くなっている。本書が少しく図式的になったのは、対象として扱った時代の性格の反映なのかも知れない。

出版されたのは少し古いですが、本書はいまでも入手できるので、後で発売された残る2書と共に推薦しておく。
(矢野 暢)

Fred W. Riggs. *Thailand—The Modernization of a Bureaucratic Polity*. Honolulu : East-West Center Press, 1966. x+470p.

本書は、一級の比較政治学者リッグス教授がものにした野心的なモノグラフである。リッグスは、従来は、もっぱら新興諸国政治についての理論づくりで知られていた。理論派の筆頭が、こうしたこうえなく実証的なしかも大部なケースワークをなしうるのだから、その底力は怖るべきものである。

リッグスの従来の理論の核心は、移行社会 (transitional society) という概念——かれはそれをプリズム的社会 (prismatic society) とよぶ——であった。その意味で、リッグスの理論は、多かれ少なかれ、伝統社会から近代社会への移行という、歴史的展望を備えるのである。リッグスの一見観念的な理論は、その点で、きわめて現実的たりうる要因を秘めていたのだ。その点が、見事に示し出されたのが本書であろう。

タイ国政治の高度の研究としては、これまでウィルソンのものがあつたが、ウィルソンは現代の統治構造の構造的分析に関心を寄せたのに反し、リッグスは、タイの統治構造の歴史的変遷に焦点を合わせた。敘述は、19世紀中期にはじまり現代にまで至る。そして、その構想は雄大である。

第1部は、タイの伝統的政体を扱い、第2部は、タイ国がたどった近代化の歴史的過程を扱う。ここらに展開される近代化の理論は、行政学的な立場からのものであれ、なかなか興味深く、特に、農林省のなかにデスクをもらって行なった、農林省の変遷の研究は、

一つのケースワークとして、たいへん効果的であったといえる。

第3部は、近代化した政体と題され、1932年以降の政治を特徴づける。タイ固有のグループ・ダイナミクスがきわめて実証的な手法で解説されている。ウィルスンのいわゆる“カナ”の理論を少し修正したうえで、そのいろいろなケースを検討しているが、現代タイ国政治を分析する一つの試みとしては、これまでの最高水準を行くものとして、高く評価されねばならない。

本書は、タイ・プロパーの専門家にとっても、また、比較政治学者や近代化理論の研究者にとっても、示唆するところを無数に含んでいる。また、本書は、タマサートの若手学者にささげられているが、リッグスがタイ国での human relations をフルに活用して、本書の肉付けをより効果的にしたことがわかる。そのことは、もっぱら英語文献に頼りながらも、本書の随所に、英語文献だけでは得られるはずがない洞察やデータが散らばっていることから知られる。本書の執筆過程では、十全な実証主義に徹しようとする心掛けが貫かれたに違いない。

それにもかかわらず、本書には一つの大きな欠点がある。それは、事実認識に誤りが多い、ということだ。特に第3部のグループ・ダイナミクスの敘述の個所はあまり感心できない。たとえば、1932年革命後の派閥斗争についての個所は、くわしいわりに、かなり事実と反している。この欠点は、政治家一人一人のパーソナリティにまでおよぶ帰納的な研究を抜きにして、単に表面的な結果だけから、集団の離合集散を *ex post* に脈絡づけようとしたことから生じたのだ。プレイヤー・パホンやプレイヤー・ソンらの政治的性格についての本書の説明を、納得するタイ人がいるだろうか。タイ国を描いた一切の英語文献のおそるべき限界を認識しないところに、タイ学の進歩はありえない、といっては過言であろうか。

これらの限界を十分わきまえた上で読むかぎり、こんな面白い本はない。少なくとも、リッグス教授の構想の雄大さは、読者を圧倒することだろう。タイ国研究は、ウィルスンの *Politics in Thailand* に加えてさらに一冊のすぐれたガイドブックを得たのだ。

(矢野 暢)

山本登編著『東南アジア開発と二重構造』
東京：1966. 222p.

東南アジア経済のひとつの基本的特徴は、その二重構造、すなわち近代産業部門対伝統的産業部門、輸出商品生産部門対国内自給生産部門、貨幣経済部門対非自給自足部門、農業部門対非農業部門、あるいは外国資本部門対土着資本部門などの対立構造にみいだされる。

この二重構造は経済開発戦略をきわめて複雑なものにする。それは経済発展の阻止的要因となることが多いとともに、経済発展にともなって二重構造がより強くなることも多い。そのため、所得の階級間、産業部門間、あるいは地域間の較差がひろまり、国内の政治的不安の一因ともなる。

この基本的な問題について、慶応義塾大学山本登教授を中心とするグループが6年間にわたっての研究をすすめられた。この成果が本書である。

この共同研究で東南アジアといわれている地域は、かならずしも厳密ではないが、山本教授の巻頭論文では、「ECAFE へのアジアの加盟国を指す。ただし、イランは除く」とある。したがって、わが国で従来採用されていた広義の東南アジアを意味し、Southeast Asia を指していないようだ。

本書はつぎの諸論文からなりたっている。

- 山本登：東南アジア経済開発の未来像
- 大山道広：低開発経済の構造と発展
- 矢内原勝：低開発諸国の二重経済構造の成立
- 田中拓男：東南アジアの二重経済構造
- 大西昭：二重経済構造と経済開発
- 深海博明：二重経済構造と外国貿易
- 田村茂：資本蓄積とインフレーション
- 佐々波楊子：東南アジア諸国の資本形成の動向
- 川田寿：二重経済構造と労使関係

したがって、理論的分析と実証的分析との両側面からの、それぞれ独立的な論文の収録といった感じが強い。いいかえると、個々の論文は、それ自体きわめて興味深い、はたして全体として二重構造が経済開発に及ぼす影響をおよぼすかについての総括的把握に弱い感じがある。しかし、この大きな問題の接近として、わが国における東南アジア経済研究の、きわだった業績である。

(本岡 武)